巻頭言

都市自然のルーツと湿地・水辺の保全・再生

環境再生の時代ともいえる今日、自然環境の保全・再生の取り組みが世界中の都市で進められている。保全・再生のビジョンやプランをつくるうえで、めざす「自然」からどのような生態系サービス（生態系が人間社会に提供する便益）を引き出すか、それについての認識の共有が重要である。また、現状を分析して、近未来において可能な状態の範囲を明らかにすることも必要である。それらと関連して、土地の歴史を遡り、自然環境のルーツを明確にすることが欠かせない。

ロンドンもパリもニューヨークも、世界の大都市の多くが河川の氾濫原を開発して発達した。もちろん、東京も大阪もその例外ではない。氾濫原には、河川の流路とともに、止水域があり、ヨシやスゲなどの生える湿性草原があり、湿性の樹林がある。タイプの異なる明るいハビタットを含むモザイク状の自然、それが多くの都市の自然のルーツである。ヨーロッパにしろ日本にしろ、都市の公園は、池あり樹林あり草地（芝生）ありで、氾濫原の自然がデフォルメされ、コンパクトな形で模倣されている。

氾濫原の水と緑の織りなす多様性に富む風景は、人々にとって心地よく、そこに身をおけば心が安らぐ。異なる環境がモザイクのように組み合わされているため、多様な動植物にも生活の場をあたえ、それゆえ多くの自然の恵み、すなわち生態系サービスを供給するポテンシャルをもつ。そんな氾濫原湿地が部分的にでも残されていたり、再生されれば、人々の憩いの場、バードウォッチング・自然観察・釣りなどのレクリエーションの場となるだけでなく、洪水から市街地をまもる遊水池・調節池として役立ち、水質浄化など、その他の生態系サービスも期待できる。

氾濫原自然を模した公園程度の段階からいっそう進んで、都市のなかに本格的な氾濫原湿地を再生することもはじまっている。ロンドン南西部、地下鉄ハマースミス駅近く、テムズ川の大きな湾曲部の内側の40haにわたる湿地再生、ロンドン湿地センター建設はその一例である。

かつて、そこにはビクトリア時代に建設された水道用の貯水池があった。貯水池はロンドン市への水道水の供給に役立ってきたが、1980年代後半に水道水は潮汐の影響をうけにくい上流部から取水されるようになり不要となった。水道会社テムズウォーターからこの土地を無償で借り受け、一大湿地帯を再生したのは「NGO水鳥・湿地トラスト The Wildfowl & Wetlands Trust（WWT、http://www.wwt.org.uk/）である。WWTは、住

東京大学大学院 農学生命科学研究科
生圏システム学専攻 保全生態学研究室 教授 鷲谷（わしたに） いづみ

宅会社バークレーホームズからの資金提供も受け、 貯水池のコンクリート護岸をはずし、湖や池沼が緑のなかに点在する湿地帯を再生した。住宅会社がパートナーとなったのは、再生湿地帯を借景とした高級建て売り住宅を販売して利益をあげることができたからである。

湿地再生の事業は1995年から始まった。旧貯水池のコンクリート護岸が壊され、砕かれたコンクリートは、新たな水辺の形状を維持したり、歩道をつくる材料として再利用された。大小の池沼、湖、干潟、湿性草原など、多様な水辺や湿性立地がつくられ、動植物に変化に富んだハビタットを与えた。

湿地全体を見渡せるビジターセンターから眺めると、広い水辺と湿地の向こうには、バークレーホームズの戸建ての住宅地、そしてその背後には、市街のビル群がみえる。湖には夥しい数の水鳥が浮かび、草原には、伝統品種のウシが放牧されて草を食む。湿地帯は、近隣地域の下水を浄化する役割をも担っている。

入場は有料だが、この再生湿地帯、ロンドン湿地センターには、多くの市民が、広々とした水と緑の風景や多様な水辺の野生生物とのふれ合いを求めて訪れる。湿地の野生生物を観察する人々のためには、600mの板張り遊歩道と総延長3.4㎞の観察路が整備されている。間近に水鳥を観察できるハイド（観察小屋）も湿地の風景に溶け込むデザインのものが6棟がつくられている。ここには、ガン、カモ、ハクチョウ、サギ、バン、シギ、チドリ類などの野生鳥類130種、蝶類24種、トンボ類19種、両生類4種が生息するほか、絶滅危惧種のウォーターラットが導入され、保全の取り組みがなされている。

ロンドンにおいて湿地・水辺を特徴とする公園のなかでは、30以上の池沼を擁するハムステッドヒースについてひとこと触れなければならないだろう。森と草原の広大な公園にはいくつもの池が点在する。そのなかには、男性専用、女性専用、共用の3つの水浴用の池もある。女性用の池は、周囲の目を完全に遮る樹林に囲まれていて、深い森のなかの神秘の池といった風情だ。泳いだ後は、水草に被われた別の小さな池のほとりの草地で木漏れ日の日光浴を楽しむ。こんな施設が2ポンドというわずかな利用料で利用できる。森の奥の池で泳ぐ贅沢の極みを手軽に楽しめるのである。それこそ水と緑のネットワークの効用である。